

「つなぐ：Tsunagu」を軸とした

日本の授業研究の国際発信に関する研究（１）

—教科教育学と教育学とをつなぐ—

研究代表者	吉田 成章（教育学系コース）
研究分担者	丸山 恭司（教育学系コース）
	間瀬 茂夫（国語文科系コース）
	小山 正孝（数理系コース）
	馬場 卓也（多文化・グローバル教育学）
	草原 和博（社会系コース）
	齊藤 一彦（健康スポーツ系コース）
	滝沢 潤（教育学系コース）
	福田 敦志（教育学系コース）
	川口 広美（社会系コース）
	金 鍾成（社会系コース）
	安藤 和久（教育学系コース）
研究協力者	藤原 由佳（教育学プログラム）
	武島 千明（教師教育デザイン学プログラム）
	澤田 百花（教育学プログラム）
	大城 朝周（教育学プログラム）

I 研究の背景と目的

1. 本研究の目的

日本の授業研究がレッスン・スタディ（Lesson Study）として世界的な注目を集め、関連する様々な理論と実践が世界的に展開されてきたことは周知のとおりである。授業研究の名を冠する国際学会である世界授業研究学会（World Association of Lesson Studies: WALs）が設立されて約 15 年を経て、その会員数や活動、地域や研究分野が多様化していく中で、さらに学会としての活動を継続・発展させるために対面とオンラインの学会開催を交代で開催していく案も出てくるなど、授業研究およびそれを取り巻く学術研究の様相も変化しつつある。

本研究は、世界的な Lesson Study の研究・実践の潮流の中で、教科のカリキュラムと領域のカリキュラム、教科教育学と教育学、学校種、地域と学校、教師と子ども、子どもと子どもといった様々なアクター・分野・領域を「越境（Boundary-Crossing）」する特徴を有してきた日本の授業研究の特質と意義を、「つなぐ：Tsunagu」というキーワードとともに世界に発信することを目的とする。

本共同研究は 2 年間の継続的な研究課題として設定する。1 年目は「教科教育学と教育学とをつなぐ」ことを主なターゲットとする。2 年目は「地域と学校とをつなぐ」ことを主なターゲットとする。ただし、主なターゲットとして戦略的にテーマと対象を焦点化して設定

するだけであり、「つなぐ」や「越境」というキーワードでの革新的な授業研究の理論構築と実践検討は2年間を通じて継続的かつ発展的に行う。

この研究目的を達成するために、これまで構築してきた二つの共同研究体制と一つの構築しつつある共同研究体制とをオーバーラップさせて研究に取り組む。その一つは、申請代表者が研究代表者をつとめる科学研究費補助金・基盤研究（A）「授業研究を軸とした教職の高度化に関する国際共同研究プラットフォームの構築」の共同研究体制（吉田，丸山，草原，馬場，福田，川口，金，安藤）である。いま一つは，大学院人間社会科学研究科附属教育ヴィジョン研究センター（EVRI）の教師教育・授業研究ユニットの共同研究体制（吉田，間瀬，小山，滝沢）である。そして現在構築しつつある共同研究体制は，WALS 2025 実行委員会（丸山，金，吉田，川口，木下，齊藤）である。なお，執筆者の二人（金・吉田）は WALS の理事として 2025 年の年次大会を広島をホストとして開催すべく，同じく執筆者の一人である丸山を実行委員長として大会開催の準備を進めている。

2. 研究課題

本共同研究では，次の三つの課題に取り組んだ。

第一に，教科教育学の研究者と教育学の研究者との協働による授業研究の実施である。教科の授業を，教科教育学および教育学の研究者と共同で（計画）・観察・分析することで，それぞれの授業の捉え方および授業研究に対するスタンスの違いを明確にする。具体的には，広島大学附属小学校での授業研究の実施とその分析，を想定している。また2年次に想定している「地域と学校とをつなぐ」を意識したフィールド調査も実施した。

第二に，教科教育学の研究者と教育学の研究者による授業の見方の違いを明確にするために，それぞれの研究者へのインタビュー調査を実施する。これは授業事後検討会・協議会等でのコメントなどに加えて，事後的にそれぞれの研究スタンスが明確になるようなインタビューを実施した。

第三に，上記二つの研究活動を踏まえて，その研究成果を日英の研究論文として研究成果発表を行う。また2年次に想定している「地域と学校とをつなぐ」を意識した共同研究も継続して実施し，WALS 2024 学会での発表および論文執筆にも取り組んだ。

上記の三つの研究課題に取り組んだ本共同研究の成果を，本稿では二つの節に集約した。一つは「教科教育学の研究者と教育学の研究者との協働による授業研究」であり，ここには三つの研究成果をまとめた。いま一つは「地域と学校との協働と世界における授業研究の展開」であり，ここには二つの研究成果をまとめた。

（吉田成章*）

II 教科教育学の研究者と教育学の研究者との協働による授業研究

1. WALS 関係の研究者との研究交流および授業研究の実施について

2024 年5月末に，シュテファン・クリーバス（Stéphane Clivaz）（スイス・ローザンヌ教育大学・教授）とシャーリー・タン（Shirley Tan）（オランダ・ヴィンデスハイム大学・研究員）との研究交流を実施した。クリーバス氏は WALS の当時の副会長であり，2024 年9月から同会長となった。タン氏は WALS の理事である。WALS2025 の広島大会の開催に向けての打ち合わせも兼ねての来日であったが，広島大学でのセミナーの実施と二つの学校で

の授業研究を開催した。

セミナーは、「Tsunagu（つなぐ）：Lesson Study in Japan and World」と題して、2024年5月30日（木）9:30-11:30に広島大学中央図書館前 a place（マーメイドカフェ）を会場に開催した。司会は金がつとめ、話題提供者にクリーバス氏とタン氏、そして広島大学からは吉田と藤原、そして明月（広島大学大学院生）が名を連ねた。指定討論者を川口がつとめ、総括コメントは丸山が行った。同セミナーでは、クリーバス氏はスイスと日本で実施している算数の授業の比較研究の成果を、タン氏は WALS の国際ジャーナルである”International Journal of Lesson and Learning Studies”に掲載されている論文の分析から初任教員研修の世界的動向を整理した成果を、そして吉田・藤原・明は広島の Y 高校における授業研究の特徴と同校での共同研究の成果を報告した。セミナーの後には会場であるカフェで研究交流の席も設け、広島大学の教員や留学生を含む大学院生を中心に約 20 名の参加があった。

授業研究は、2024年5月29日（水）に広島大学附属小学校にて、そして2024年5月30日（木）に広島県立吉田高等学校にて実施した。本共同研究のメンバーである金と吉田は、それぞれ教科教育学と教育学を専門としており、教科教育学と教育学を越境する授業研究の共同の機会ともなった。

（吉田成章*）

2. 広域交流オンライン学習について

2024年12月11日に、広島大学教育ヴィジョン研究センターと東広島市教育委員会が共同で実施する広域交流型オンライン学習が行われた。内閣府が取り組む戦略的イノベーション創造プログラム（SIP）のもとで推進されている「デジタル・シティズンシップ・シティ：公共的対話のための学校」の事業の一環であり、ICTやAIを活用することで、他の学校・教室の子ども、市民がつながる新たな公教育の創出を目指す試みである。大学の研究者がT1として授業の進行を行う様子が各教室に配信される同時双方向型の授業であり、各教室には学級担任等（T2）および大学から派遣されるサポートスタッフ（T3）が配置されている。

本時は、小学4年生を対象に、2時間連続（45分、45分の90分間）で「事故や事件からまちを守る：交番や駐在所の数はこのままでよいのか！？」をテーマに授業が行われた。参加校の内訳は、東広島市内の小学校8校19学級（約500名）および校内教育支援センタースペシャルサポートルーム、校外教育支援センターフレンドスペース、広島県教育支援センターSCHOLL “S” である。T1を草原和博教授がつとめ、筆者は各教室に派遣されるサポートスタッフ（T3）としてオンライン対応や子どものICT機器使用の支援等を行った。なお、指導案や教材、授業の様子はホームページ「デジタル・シティズンシップ・シティ：公共的対話のための学校」https://sip-dcc.hiroshima-u.ac.jp/class_practice/ にて公開されている。

授業の導入部分では、まず、子どもたちの身近な警察の施設である交番に着目させ、東広島市の警察署・交番・駐在所の分布の特徴（集中している「ギューギュー」と、まばらである「スカスカ」）は「当たり前」か「納得できない」かがT1より子どもたちに投げかけられた。続く展開では、こうした分布の理由を事件数、人口、交通網の3つの資料にもとづき考察したのち、どこの交番・駐在所を減らすか／どこに増やすかを教室ごとに議論し、終盤にはT1によって指名された教室の意見が次々と全体に共有された。

T3 として授業支援を行うなかで、子どもたちが画面越しの T1 や他の教室の声を聞きたい・自分の声を聞いてもらいたいという強い思いをもって授業に向かっていることが印象的であった。タブレット端末を用いて一人ひとりが投票や回答を行うさいには、全体の結果が T1 によって発表されることを心待ちにする様子がみられたほか、他の教室から自身の教室とは異なる意見が発表されたさいには「なんで」「でも」と口々に声が上がった。こうした子どもたちの姿は、越境する教室空間が現に生み出されていることを示すものであろう。

他方で、日常生活と学習をともにする「この」教室の仲間たちと学ぶことの意味の追求もまた必要である。筆者がいた教室では、各教室での議論の時間に、ある子どもの発言にたいして別の子どもが「よく分からなかったからもう一度説明してください」と要求したものの、T1 の声によって授業は次の場面へと展開し、子どもたちの間での議論が断絶した場面があった。T1 による進行と、各教室で生起する文脈とがぶつかる場面において、授業の進行を決めるのは誰なのか、対面と遠隔を併用した公共的な対話の実現を目指す本事業において、20 坪の教室で教師と子どもがことばを交わす営みをどう位置づけるのかが問われているのではないだろうか。このことは、教科教育学と教育学との越境による授業研究の可能性ということにとどまらない、オンラインを介した教育による公共的な対話の空間の創出といま「ここ」でともに学ぶことの公共性の構築とをいかに架橋するののかという教育学的かつ学際的な研究・実践上の課題への対峙の必要性を示唆している。

(草原和博・滝沢潤・澤田百花*)

3. 広島大学附属福山中・高等学校越境研究会について

2024 年 12 月 14 日、広島大学附属福山中学校・高等学校（以下、附属福山中・高とする）にて「越境の視点を取り入れたカリキュラム開発研究会」が行われた。この研究会は、2027 年度より附属福山中・高が中等教育学校化することを見据えたものである。附属福山中・高の強みである教科指導を主軸としつつも、それらの枠組みを「越境」するカリキュラムないしは授業を開発することを目指し、開催された。本研究同人からは、カリキュラム検討委員会の委員長である草原、同副委員長である吉田、大学院生の武島・大城が参加した。

午前の部は、まず、附属福山中・高の中等教育学校化の経緯とカリキュラム開発の経過、および本研究会の趣旨について説明がなされた。その後、法政大学大学院 政策創造研究科の石山恒貴氏より「不確実性の高い環境下における越境学習の価値」と題した基調講演がおこなわれた。石山氏は、越境学習について、多様な個々人が他者との対等にかかわりあいを通して自らの固定観念を打破する学びのことであり、「冒険」のようなものであると説明した。また、越境学習の事例について、企業主導、個人主導のものに加え、学校の授業におけるものも紹介し、その価値を、「自ら学びたい」という学習者の願いをかなえることであると述べた。

午後の部では、附属福山中・高の保健体育科・社会科・数学科の 3 名の教員より、「感染症の数理モデルの社会的活用をめぐる越境」と題した、教科の越境をテーマとする提案授業（以下、本授業）がなされた。本授業の前半部では、数学科の教員により、感染症の拡大を予測するための公式である「SIR モデル」の説明がなされた。また、その公式を用いた練習問題の演習がおこなわれた。後半部では、「未知のウィルスが発見された」という仮定のもと「大掛かりな外出機会削減を実施するかどうか」について、生徒たちがディベート形式で

議論を展開した。生徒たちは、外出機会削減の肯定派（2グループ）、その否定派（2グループ）、ディベートの勝敗を決める審判（2グループ）に分けられ、情報収集や立論を目的としたグループワークをおこなった。グループワークでは、事前に学習した保健体育科・社会科の内容および前半部の数学科の内容を活用するよう、授業者らから声掛けがなされた。その後、グループワークの成果をふまえ、肯定派と否定派によってディベートがなされた。最後に、審判役の生徒たちによるディベートの勝敗を決める投票、生徒全員での感想の記入がなされ、本授業は終了した。

提案授業をふまえ、事後協議として授業者による意図開示ならびに観察者らによる質疑応答がなされた後、座談会が行われた。座談会には、附属福山中・高より半井校長、石井研究部長、實藤教諭、広島大学大学院より草原、吉田が登壇し、意見を交わした。草原は、教科横断に関する類型について、教科教育学研究による知見から説明し、提案授業の位置づけを試みた。また、吉田は、カリキュラム開発の軸となっている「越境」に関する附属福山中・高の現状として、個人単位での「小さな越境」、行事などをおとした「大きな越境」が実現できていることを挙げた。また、そのうえで今回の提案授業を、「小さな越境」と「大きな越境」の中間に位置づく越境のあり方に挑戦したものとして評価した。これらをふまえた議論をとおして、附属福山中・高のこれからのカリキュラム開発の方向性が再確認された。

本研究会で議論の俎上にのぼった「各教科どうしをつなぐ」という課題は、実践者・教科教育学の研究者・教育学の研究者に共有されるものである。異なる立場の人々が、一つの授業をそれぞれの立場から見つめることで、視点や意見を交流できた点、またそこから忌憚のない議論を交わせた点が、本研究会が授業研究のかたちで実施されたことの意義である。

これから、附属福山中・高が中等教育学校としての歩みを進めるなかで、カリキュラムがどのように展開していくのか、という点にも引き続き着目していきたい。

（草原和博・武島千明*・大城朝周*）

Ⅲ 地域と学校との協働と世界における授業研究の展開

1. 「地域と学校の協働を軸とした教育機会保障」をめぐるラウンドテーブル

滝沢・吉田・安藤が研究分担者として参画している研究プロジェクト、「地域と学校の共同を軸とした教育機会保障に関する学際的研究—多様な子どもの多様なニーズに応える学習システムの構築と支援に着目して—」（研究代表者：俵龍太郎）は、中国四国教育学会の2024-2025年度課題研究に採択されたプロジェクトである。同プロジェクトは大学院生を中心とした若手研究者の研究推進のための学会の助成を受けた共同研究プロジェクトであり、その成果の一部が、2024年11月23日（土）岡山大学を会場に開催された第76回中国四国教育学会で「地域と学校の協働を軸とした教育機会保障に関する学際的研究（1）」をテーマに企画したラウンドテーブルにて発表・報告された。本発表では、熊本市が実施する地域と学校が協働した不登校児童生徒支援であるフレンドリーオンラインを主な調査対象とし、地域と学校とが協働することでいかなる教育機会保障を実現しうるのか、またその取り組みに対して教育行財政学・教育社会学・教育方法学といった教育学の領域を横断した調査・分析を行うことでいかなる意義と課題が浮かび上がってくるのか、を明らかにすることを目的とした。

一人目の報告者は、フレンドリーオンラインにおける学習機会保障と居場所としての機

能に着目し、それを支えているカリキュラムの編成や支援員の配備についての詳細を報告した。不登校児童生徒が「どこともつながれない」ことへの問題意識から「オンラインを活用した居場所の確保」を重視している一方で、フレンドリーオンラインにおいて「地域の組織」等の関与が見られなかったことを指摘し、地域と学校が協働した支援体制の構築に向けての課題が存在していることも明らかにした。

二人目の報告者は、フレンドリーオンラインの支援員や熊本市教育委員会へのインタビュー調査を教育社会学の視点から分析し、フレンドリーオンラインの関係者がとりわけ「不登校」の問題に対してどのような認識を持っているのかを明らかにした成果を報告した。

「不登校」に関する言説も提示したうえで、関係者からは、「心の問題」「進路の問題」から距離を取り、あくまで「選択の問題」として不登校問題を位置づけようとする語りが得られたことを報告した。そのうえでその意義について、不登校児童生徒が公教育と関わる場の多様化と、不登校における地域格差の解消という2点から言及した。

その後のフロアも交えた議論では、フレンドリーオンラインにおける学習の質に関する議論が行われると同時に、フィールドの何をなんのためにどのように見るのかといった学際的に対象にアプローチしたからこそ生じたレンズのズレについても議論され、より良い分析や知見の提供に向けて各専門領域をいかに繋いでいくのかが議論された。

(滝沢潤・福田敦志・安藤和久*)

2. 世界授業研究学会 (WALS) 2024 年次大会と 2025 年 WALS 広島大会に向けて

(1) WALS2024 年次大会への参加報告

WALS の 2024 年次大会が、2024 年 9 月 24 日から 26 日にかけて、カザフスタン・アスタナで開催された。本大会のテーマである“Lesson Studies: Aspiring to Better Learning and Teaching”というテーマのもと、3 日間にわたって各プログラムで参加者の交流が行われた。本会には、広島大学から安藤、金、草原、齋藤、丸山、吉田、そして大学院生は大城、澤田、藤原（所属、50 音順）が参加し、共同研究発表や Ph.D/ECR プログラム、スクールビジットへの参加ならびに、来年度の WALS2025 広島大会に向けた PR に取り組んだ。以下、各日程でのプログラムごとに報告する。

大会前日には、Ph.D/ECR プログラムと理事会が開催された。Ph.D/ECR プログラムは、博士課程の院生や若手研究者が交流するプログラムとなっている。今回のプログラムは、元 WALS 会長であるキャサリン・ルイス先生の挨拶や参加者でのアイスブレイクの時間のうち、二つの基調講演と WALS の機関紙である“International Journal for Lesson and Learning Studies” (IJLLS) の中から選ばれた三本の論文を題材にどのようなテーマで書かれた論文が機関紙に載っているか、各参加者が今後 Lesson Study に関わる研究論文を構想しているか、について交流した。

大会期間中は、広島大学関係者の共同研究発表が三本あった。一つ目は、Developing a high school curriculum with Lesson Study: a case study of inquiry-based curriculum in Japan をテーマとした発表である。二つ目は、Reversing the power dynamics in Lesson Study: A Case Study of Koshi's Research Lesson and post-lesson discussion をテーマとした発表である。三つ目は、Validation of TPACK development program through lesson studies by teacher educators in Japan

をテーマとした発表である。研究発表のほかにも、オランダ大会から開催されている Teacher Talk “My Story”という企画や会場のフロアでの展示企画といった企画もあった。

大会三日目の Closing Ceremony では、実行委員長である丸山先生と常務委員である金先生と吉田先生が、2025 年の WALS 広島大会に向けた PR プレゼンテーションがあった。

大会後には、カザフスタンの小学校や中学校でのスクールビジットに参加した。実際に参加したスクールビジットでは、まず子どもたちによるウェルカムレセプションがあった。その後、授業を参観したのちに事後検討会があり、参観した授業についての参加者同士で交流した感想・意見を授業者へフィードバックした。

WALS2024 の大会への参加を通して、日本と世界の授業研究に関するネットワークづくりや来年の広島大会の運営に関わる視察に取り組むことができた。

（２）WALS2025 広島大会の開催に向けて

2025 年の WALS 年次大会は、2025 年 11 月 10 日から 12 日の、広島市内の国際会議場での開催が決まっている。日本での開催は、2011 年の東京、2017 年の名古屋に続いて三回目の開催となる。現在、開催にあたり、広島大学関係者を中心とした実行委員会を組織し、プロフェッショナルカンファレンスオーガナイザーとして株式会社 PCO や、広島大学教育広島大学教育学部や広島大学教育ヴィジョン研究センター（EVRI）と連携をしながら準備を進めている。

大会プログラムとしては、大会前日となる 11 月 9 日には Ph.D/ECR プログラムと理事会を予定している。大会期間は 11 月 10 日から 11 月 12 日である。大会期間中では、各研究発表のほかにも、一日目には平和資料館へのエクスカーショント、二目には大会懇親会、三日目はジャパンデイとして日本語での発表、大会主催者企画として公開授業研究の実施を予定している。大会後には、ポストカンファレンスエクスカーショントとして、広島市内外でのスクールビジットやエクスカーショントを予定している。

WALS 広島大会の大会テーマは「TSUNAGU（つなぐ）」である。このテーマには、日本と世界の授業研究、教育学と教科教育学、授業研究と教師教育といった様々なつながりを生む大会にしたいという、大会主催者としての思いが込められている。

広島大会に向け、Lesson Study への関心を広げることができるよう国内外での広報活動や大会準備を行っていくための共同研究・運営体制の構築に引き続き取り組む必要がある。

（丸山恭司・草原和博・馬場卓也・齊藤一彦・金鍾成・安藤和久・藤原由佳*）

IV 研究の成果と今後の課題

本研究の成果は、以下の三つに集約される。

第一に、学術論文等の刊行による知の発信と還元である。教科教育学と教育学とを「つなぐ」本共同研究プロジェクトの成果として、Miyamoto et.al.(2025)の英文ジャーナルの執筆、そして山元・吉田(2024)のような附属学校とも連携した研究成果の刊行、そして吉田ほか(2025)のような学校との共同研究体制の延長としての『研究紀要』原稿の執筆などに取り組むことができた。また今年度の共同研究プロジェクトの取組と成果としては記すことができていないが、草原を中心として教科教育学コンソーシアムの取組の成果の発信として著書の刊行プロジェクトが進行中であり、本共同研究プロジェクトで取り組んだ成果も反

映される予定である。

第二に、世界的な研究ネットワークの構築である。WALS の研究者らとのセミナーの開催と授業研究の実施、そして WALS2024 年次大会への参加と研究発表等を通じて、これまでにない研究ネットワークの構築に取り組むことができた。また、本共同研究プロジェクトの直接の成果ではないが、WALS の理事であるサラー・セレチニョフ (Sarah Seleznyov) 氏の論考が日本カリキュラム学会『カリキュラム研究』の海外研究情報に掲載される予定であり、同論考の日本語翻訳に本共同研究プロジェクトメンバーの一部が従事し、授業研究を介した国際研究ネットワークの発展につなげている。

第三に、学校との連携体制の構築と発展である。広島大学附属校や広島県の公立学校、そして東広島市の公立学校と、本共同研究プロジェクトを介して共同研究体制を構築することができた。WALS2025 では School Visit という学校訪問を通じて授業研究に参加するオプションのプログラムが用意される予定であり、本共同研究プロジェクトで関わったいくつかの学校をその候補として設定する予定である。日本の教育実践、とりわけ授業研究を軸とした教師教育実践の特質と意義、そして世界的な動向から見た今後の展望と課題を、大学や学会を中心とした学術研究と学校を中心とした教育実践の創出とを「つなぐ」共同研究として、さらに発展させていきたい。

(吉田成章*)

引用文献

- Yuichi Miyamoto, Nariakira Yoshida, Atsushi Fukuda, Kazuhisa Ando, Yuka Fujiwara, Yue Ming, Momoka Sawada, Tomochika Oshiro(2025), General Didactics meets Subject Didactics: Lesson Study at the Intersection of Two Academic Fields, *Research in Subject-matter Teaching and Learning*, 7(1), 164-179, <https://doi.org/10.2478/ristal-2024-0013>
- 山元隆春・吉田成章(2024)「「越境」型カリキュラムの開発と実践による学び続ける主体の育成に関する研究—2023 年度広島大学附属校園研究推進委員会の取組と各附属校園の研究実践—」『広島大学附属学校園研究推進委員会報告書』2023 巻, 1-7 頁。
<https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055331>
- 吉田成章・滝沢潤・武島千明・明月・深谷周平・小島隆世・黄楷文・張笑恬・平山大晟 (2025) 「学校を軸とした地域づくりによる学校カリキュラム再編の意義と課題—学校にとっての地域の意味と地域にとっての学校の意味を視点として—」広島県立日彰館高等学校編『研究紀要』第 22 号, 印刷中。
- 吉田成章・滝沢潤・藤原由佳・武島千明・澤田百花・明月・深谷周平・小島隆世・平山大晟(2025)「生きることと学ぶことをつなぐ高等学校探究実践の模索—広島県立吉田高等学校の取組の特徴と課題を踏まえて—」広島県立吉田高等学校編『令和 6 年度広島県立吉田高等学校研究紀要』, 印刷中。